

シビルウエディング・
ミニスターが語る

心にある拳式

ブライダル関連の仕事とまったく関係のない医療法人に勤務する私に、拳式を司る「シビルウエディング・ミニスター」の資格を取らないか

と勧めたのは、ブライダルディレクターの相良眞壽子さんでした。

彼女から新しい拳式スタイルの説明を受けた私は、感銘を受け、仕事とは別にこれから新たな第一歩を踏み出すカップルを見届ける役目を務めたくなり、早速に資格取得のセミナーに参加したので

きびしい実地試験をパスして2005年の秋にミニスターの称号を得た私が、初めて司式を

行ったのは同年12月23日でした。

こう書くと簡単にこの日を迎えたと思われるでしょうが、実際はここまで試行錯誤の連続でした。それはシビルウエディングには、教会式や神前式のような「形式」や「箱」の助けがないからです。流れ作業的な司式は許されず、司式者は打ち合わせの段階から新郎新婦の希望を汲み取り、2人のためのオリジナルな拳式を考えなければなりません。そのためには、打ち合わせで「聞き上手」に徹しなければなりません。

初めてのシビルウエディング

2人の出会いのエピソード、仕事の内容や将来どのような家庭を築きたいのか、立会人代表を務める方との関係、両親の希望など、両人の話を上手に聞き出し、それらを基にこの2人にふさわしい拳式を組み立てます。一番の苦労は、2人との談笑を基に作成する祝辞の原稿でした。

「シビルで拳式をして本当に良かった」の評価は、新郎新婦は 물론、家族、親族、友人など列席者に感動と説得を与える祝辞のよしあしで決

まるからです。

原稿が完成すると、私は拳式の流れを計算しながら、妻の前で何度も何度も練習しました。そして当日、会場で2人の婚姻の証人となる方々の列席のなか、拳式がスタートいたしました。

司式は順調に進行、祝辞を贈るときがきました。

祝辞の原稿を作成したとき、私は今回だけでなくこれから先も最後の1節を、「新郎の〇〇さん、どうか誠実でやさしく、強い夫になって〇〇さんを大きく包み込み、ずっと守ってあげてください。新婦の〇〇さん、どうか心やさしく聡明な妻になって〇〇さんを支えてあげてください」で結ぶことにしました。

それをゆっくりと語りかけるように述べたとき、2人の目に光るものを見ました。私の胸は、「いつまでも健康で、仲良く、楽しい家庭を築いてくださいな」の思いで一杯になりました。

列席者に見守られ、沢山の拍手に送られながら2人は退場。

彼らに続いて私が退場する際、両家の親御さんが席を立

ち、私に近づき素晴らしい笑顔でうなずいてくださいました。

喜びの気持ちでいっぱいになった私は、おもわず熱くなった目頭を押さえました。

初めての司式を130名の列席者と共に行った私は、新郎新婦、家族、友人など沢山の方々のよろこびと幸せを分かち合うことができました。同時に、シビルウエディング・ミニスター規則の2項にうたわれている、「式の列席者に感動と喜びを与える」司式の実現にこれからも大いに努力せねばならないと、最初の司式が無事に終了した安堵感のなかで思いました。



シビルウエディング・ミニスター
内田 和夫氏

(うちだ・

かずお) 1948年東京生まれ。2005年シビルウエディング・ミニスター資格取得。現在、医療法人士会勤務

